

小学校外国語活動における ALT の活用の 在り方に関する基礎的研究(2)

— 小学校外国語活動の目標は ALT にどう理解されるか —

築 道 和 明

広島大学外国語教育研究センター

大 谷 みどり

島根大学教育学部

ウォルター・デイヴィス

広島大学外国語教育研究センター

はじめに

2008年（平成20年）3月28日に示された小学校の学習指導要領では、2011年（平成23年度）より小学校の第5学年、第6学年で年間35時間の「外国語活動」が必修として導入されることとなった。その目標は、以下のように示されている。

外国語を通じて、言語や文化について体験的に理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませながら、コミュニケーション能力の素地を養う。（文部科学省，2008，p.7）

新しい学習指導要領に関する多くの解説書等で示されているように、小学校外国語活動の目標は、外国語を通じて、①言語や文化についての体験的理解を深める、②コミュニケーションへの積極的な態度を図る、③外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しむ、という3つの下位目標を統合的、有機的に実現することによって、「コミュニケーション能力の素地」を養うという最終的な目標を到達するという点にある。直山（2009）は、この目標設定により小学校外国語活動から中学校、高等学校の外国語科の目標がコミュニケーション能力の「素地」→「基礎」→「能力」というように系統的につながったと述べている。また、中学校以降の外国語教育と比較した場合の小学校外国語活動が有する特徴として、言語や文化の理解において「体験的活動」を重視しているという点、さらには「外国語の力、スキルを重視した目標ではない」という点にあると指摘している。特に、後者に関しては、目標記述中の「外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませながら」の後の読点の存在が重要であるとし、これにより三番目の目標の柱は前の二つの目標を達成するための手段という位置づけになるとしている。この論法が説得力あるものか否かは別にして、今回の外国語活動の目標は、Driscoll(1999)の初等学校外国語プログラムの二分法に従うなら、外国語運用能力の基礎を養成する“Language Acquisition programmes”ではなく、母語を含めた言語学習技能を養成し、言語や文化に対する気づきや発見を重視する“Sensitisation programmes”という性格を有するものであると言える。

このように、小学校外国語活動のねらいは外国語習得、とりわけ外国語のスキルの習得を意図したものではなく、外国語を通じて言語や文化の体験的な理解を図り、コミュニケーションに対する積極性を育てながら、中学校以降の外国語科につながるコミュニケーション能力の素地を養うという点にあるが、その成功を左右するものとして指導者をどうするかという問題が残されている。この点に関して、文部科学省は後述するように、学級担任が中心になりながら“assistant

language teachers”（外国語指導助手，以下 ALT）をはじめとする外部人材の活用等により支援するという基本的な立場を示している。

学級担任を支援するに際して ALT を活用するといった場合に、何ら準備せず、ALT が教室に居れば異文化理解につながるというような安易な発想だけは避けるべきであろう。中等学校の外国語教育においても20年以上の歴史を有する ALT とのチームティーチングの導入段階では、「黒船の襲来」に例えられるほど大きな混乱が生じたことを考えると、小学校では、ALT の異文化適応上の問題は言うまでもなく、チームティーチングに関しても中等学校現場に導入された時よりもさらに多くの問題や混乱が予想される。なぜならば、中等学校での外国語科とは異なり、小学校の外国語活動は担当教員の外国語運用能力をはじめ、カリキュラムや教材、指導方法、評価方法等、その全体にわたって未知数の部分が多いからである。とりわけ重要な問題として小学校教員に対する研修という課題がある。つまり、当事者である小学校教員も今後外国語活動について研修を受けていかなければならないのである。もちろん、文部科学省による小学校教員（中核教員）対象の研修や研修用のハンドブックの作成、DVD の配布等の支援はあるが、小学校教員の側から言えば、「小学校外国語活動」という新たな課題に取り組みながら、同時に「ALT とのチームティーチング」という別の新たな課題に直面しなければならないのである。これまでの中等学校でのチームティーチングでしばしば指摘されてきた ALT の役割の曖昧さ、仕事のなさ等、ALT の不満につながる要因について十分に検討を加え、小学校外国語活動において ALT をどのように活用するかを早急に考える必要がある。

そこで、筆者らは、小学校教員の外国語活動に関する研修に焦点を置いて、その研修の中に ALT をどの様に活用していくかというテーマの研究に2009年度から着手した。大谷・築道(2009)では、ALT がどのような異文化理解上の課題に直面しているかを把握するために、先行調査で明らかになった主要な課題との比較という視座を縦糸に、また、中学校（高等学校）の英語科授業を担当する場合と小学校の外国語活動を担当する場合との比較という観点を横糸に置き、A 市に勤務する ALT に対する予備的な調査を実施し、その結果の概要を報告した。その結果、ALT が直面している課題の多くは職場の人間関係に関しても、教室内での役割に関しても、先行調査で指摘されている課題の多くと類似していることが明らかになった。

本稿は、小学校外国語活動を実践する上で、学級担任を支える鍵となる人物としての ALT が、小学校外国語活動の目標をどの様に理解しているかをアンケート調査により明らかにした上で、小学校外国語活動に関わる研修において ALT にどのような内容を提供すべきかについてヒントを得ようとするものである。具体的には、文部科学省によって英語に翻訳された小学校外国語活動の目標部分を B 県の ALT に対して提示し、自由記述式のアンケートにより、広く意見を求める。その際、比較のために中学校外国語科の目標も併せて ALT に提示する。また、来日直後の ALT と1年以上の日本での経験を有する ALT との間で目標のとらえ方に差があるか否かも分析する。これらの分析を通して、小学校外国語活動を推進していく上で、学級担任と ALT との間でどのようなコミュニケーション上の問題が生じる可能性があるかを探り、ALT を取り込んだ小学校外国語活動の研修プログラムの構築に向けて、何らかの示唆を得たい。

1. ALT と外国語活動の関係

1.1. 学習指導要領の記述にみる課題

前述したように、2011年（平成23年度）より小学校の第5学年、第6学年で年間35時間の「外国

語活動」が必修領域として導入されることになった。これに伴い、2009年度からは、その移行措置として各小学校に『英語ノート』をはじめとする指導のための支援資料が配布され¹⁾、教員研修も進められている。改訂された学習指導要領の解説において、文部科学省は指導計画の作成や授業の実施に関して、次のように述べている。

- (5) 指導計画の作成や授業の実施については、学級担任の教師又は外国語活動を担当する教師が行うこととし、授業の実施に当たっては、ネイティブ・スピーカーの活用を努めるとともに、地域の実態に応じて、外国語に堪能な地域の人々の協力を得るなど、指導体制を充実すること。(前掲書、p.15)

ここでは、小学校外国語活動に関与する者として、①その計画・立案・実施の全般にわたって中心となるべき学級担任の教師(あるいは外国語活動担当教師)、②授業の実施を支援する外国語を母語とする人、③地域の人材、の3者が想定され、これら3者を統合的、有機的に活用すべきであるとする考え方が示されている。ALTは、ここでは②のカテゴリーに該当する。この記述は、小学校外国語活動に向けての教員養成等が未だ不十分な状況にある現在では、これまで多くの研究開発学校でのALTをはじめとした外部人材を活用した実践経験に基づく「現実的な」選択肢の一つを提案しているのとらえることができる。しかしながら、「現実的な」アプローチではありながらも、その記述内容を全国の公立小学校全てにおいて即座に実践に移すには解決すべきいくつかの課題もある。

まず、外国語活動を主導する学級担任の側の問題である。1987年にJETプログラム(Japan Exchange and Teaching Programme、語学指導等を行う外国青年招致事業)によりALTが中等学校に配置された際、外国語教育の専門的な知見を備えている(はずの)中等学校外国語科担当教員にとってもALTとの協同授業の構築には大きな問題があったわけである。そのような観点から言えば、外国語教育に関して何ら専門的な知見を有していない小学校の学級担任は、小学校外国語活動を計画、実施するという点で既に大きな難問に直面しているものであり、さらにALTや地域人材を積極的に活用すべきであるとする先の指摘は、更なる難問を学級担任に突きつけることになりかねない。

一方の当事者であるALTにとっても解決すべき課題があると言える。ALTの多くは、外国語教育の改善に向けての熱意を有して来日している²⁾。一方で、小学校外国語活動の必修化にあたっての我が国の議論では、その性格づけが「国際理解」か「スキル」かといった二項対立的な枠組みの中で進められ、「コミュニケーション能力の素地」を養うという記述で学習指導要領にはまとめられている。20年以上にわたって繰り広げられてきた小学校の外国語教育についての議論でも、意見の一致や万人が納得する解釈に至っていない現状を考えると外国語教育の改革に対して熱意を持って来日しているALTにとっては、「スキルを教えない」、多様な外国語や文化に触れさせる「体験的な活動」を中心とした小学校外国語活動の趣旨やねらいは、おそらく理解し難いものと映るのではないかと懸念される。さらに、学級担任の側の外国語運用能力とALTの側の日本語運用能力が十分ではないとすれば、両者をつなぐ「コミュニケーションの問題」は、極めて重要な問題につながる可能性もある。

1.2. ALTの活用に関する課題

小学校外国語活動にネイティブ・スピーカーや地域人材を積極的に活用すべきであるという文部科学省の考えであるが、全国に2万校以上ある公立小学校全てに、例えばALT1名を配置する

ということが財政的にも人材的にもそもそも可能なのだろうか。以下、中等学校も含めて、ALTの配置における実態と問題点を検討してみる。

小串(2008)によれば、JETプログラムにおけるALTの招致人数は初年度の1987年では813名、その後増加し続け、2002年度の5,676名をピークに漸減傾向になり、2007年度は4,707名という現状である。一方で、民間の契約団体と地方自治体との間での直接契約による雇用形態もみられるようになってきており(いわゆるNon-JETによるALT)、2006年度ではNon-JETによるALTはJETプログラムの招致人数を上回る5,951名に上っている。これには、二つの要因が影響していると思われる。第一に地方自治体の厳しい財政状況の影響である。また、関連してJETプログラムの場合、招致青年の生活適応上の支援や労務管理等に多くの時間とエネルギーを費す必要があるということもある³⁾。その点でNon-JETのALTは、雇用にかかる費用も低く抑えることができ、様々な雑務を派遣会社が全て行ってくれるというメリットもある⁴⁾。第二に、現行の教育課程に総合的な学習の時間が導入され、その中で国際理解の一環として外国語活動が実践されるようになり、そのことにより小学校におけるALT、特にNon-JETによるALTの活用ということにつながったのではないかと考えられる。

次に、ALTの活用実態についてみる。文部科学省が実施した教育課程の編成・実施状況調査では、2008年度の段階でALT(JETプログラムとNon-JET)の活用率は、小学校の場合は79.2%であるのに対して、中学校の場合は25.1%に留まっている。これらの数値だけを見るとALTに対するニーズは小学校の側から強く求められているということが浮かび上がってくる。その背景には、小学校外国語活動を担当する学級担任の側の外国語運用能力や指導力に対する不安、また、児童にとっての学習への動機づけとしてのALTの存在等の要因が影響していると思われる。

では、児童はALTをどうとらえているのだろうか。国立教育政策研究所(2009)の報告によれば、指導者・指導形態と児童の英語活動に対する好き嫌いとの関係(「英語の授業が好きですか」)を調査した結果、表1に示すように「主担当がALT」の指導形態において、第5学年次の肯定的回答の比率が他の指導形態よりも低く、さらに第6学年次の肯定的回答が下がる傾向にある。一方、「主担当が学級担任でALTなし」では、第6学年次の方が肯定的回答の比率が上がったとしている。この調査では「主担当がALT」に該当する小学校が2校のみであり、調査対象校に勤務するALTの個人的な資質や能力等が児童の回答結果(肯定的評価の低さ)に影響したとも考えられるので、ALT中心の外国語活動では児童の英語嫌いが増えるといったような軽率な一般化は控えるべきであるが、本調査によって学級担任の主体性や英語活動に対する取組みへの姿勢というものが、児童の英語活動に対する情意的な側面に何らかの影響を及ぼしているということは言えそうである。

表1 指導形態と児童の英語活動に対する好き嫌い感情との関係

	学級担任		担任+ALT		ALT	
	好き	嫌い	好き	嫌い	好き	嫌い
小 5	78%	6%	72%	10%	65%	16%
小 6	80%	7%	67%	12%	38%	23%

(国立教育政策研究所の報告書に基づき、主な回答結果を筆者らでまとめたもの)

いずれにせよ、今後、教員養成や教員研修等が本格化し、外国語活動に関する知見と指導力を有する小学校教員が計画的に生み出されるまでは、文部科学省が求めるように外国語活動の授業計画や実践の中心には学級担任の教員が、また、授業支援として ALT や外部人材の登用というアプローチが最も現実的な姿であるとは言えるだろう。

2. 本調査の概要

2.1. 調査の目的

本調査では、2008年3月に告示された小学校外国語活動及び中学校外国語科の目標（英語訳）を取り上げる。教育課程を編成し、具体的な授業を計画する出発点となるのが、学習指導要領というものの性格である。その目標を小学校外国語活動に関与する者が正しく理解するということは極めて重要なことである。その場合、日本語を母語とする小学校教員は、外国語活動に限らず新しい学習指導要領の趣旨説明や解説については、教育課程についての研修をはじめ書物等の情報源から入手することができよう。一方、ALT にとっては、小学校外国語活動に関して、どのような情報が必要であるかということ自体が現段階では不明である。そこで、本稿では、小学校外国語活動及び中学校外国語科の目標（英語訳）を ALT がどう理解するかを以下の二つの観点を中心に分析し、考察を加える。

- (1) 小学校外国語活動の目標と中学校外国語科の目標について ALT は、どの様に理解しているか。また、両者の目標の理解に違いがあるか。
- (2) ALT としての経験年数によって、上記の理解の仕方に違いがあるか。

目指すべき山頂（目標）を共有しない限りは、そこに至る道筋は明らかにならないように、小学校外国語活動におけるゴールが指導する側に共有されなければ、個々の活動が如何に楽しいものであろうと目標地点にたどり着くことにはつながらない。その意味で、本論文で取り上げる ALT の視点からの小学校外国語活動の目標理解の分析は、今後の小学校外国語活動を進めていく上で、重要な出発点になると考える。とりわけ、小学校教員と ALT とが協働で外国語活動の実践を進めていく上では、年間指導計画→単元計画→1時間の授業計画、というようにマクロな観点からミクロな個別授業を構築していかなければならず、そこには外国語活動の目標や趣旨についての適切な理解が裏付けとしてなければならない。今回の調査によって、今後 ALT とのチームティーチング上、生じるコミュニケーションの問題等についても把握し、小学校外国語活動のための教員研修プログラムの基本的な枠組みについての示唆を得たい。

2.2. 調査方法

筆者のうち大谷と築道の二人は、2009年8月25日に、中国地方の B 県で実施された ALT に対する非公式の研修プログラムに講師として参加した。そのうちの一人（築道）が担当した講義の中で、文部科学省が示している小学校外国語活動及び中学校外国語科の目標部分の記述を含んだアンケート調査を研修に参加していた ALT に配布し、その場で記入を依頼した。アンケート調査の実際については Appendix を参照されたい。記入に要した時間は10分程度である。合計で28名から回答を得た。28名のうち、JET プログラムの ALT（元 ALT を含む）という立場ではない者が3名いたので、以下の分析対象からははずすことにし、合計25名の回答を中心に分析を進める。

25名のうち、調査時期直前に来日した ALT が13名（新規参加者）、1年以上の経験者が12名（2年目4名、3年目3名、4年目以上5名）であった。

2.3. 調査結果と考察

25名の ALT からの回答内容に基づき、小学校外国語活動、中学校外国語科それぞれの目標毎に ALT のコメントを分類し、表2に示した。まず、小学校外国語活動についても中学校の外国語科の目標記述に関しても、'great,' 'positive,' 'good' 等、肯定的な評価を含むコメントがみられた。肯定的なコメントに加えて、ALT 自身の解釈を述べたコメントも小学校外国語活動、中学校外国語科の両方の目標に関してみられた。より具体的には、小学校外国語活動の目標については、「楽しさ」('fun,' 'enjoyable'), 「言語と文化の理解」('understanding of languages and cultures'), 「体験を通じて」('through experience') 等のキーワードが、一方の中学校外国語科

表2 小学校外国語活動と中学校外国語科目標記述に対する ALT からのコメント

	小学校外国語活動の目標に対するコメント	中学校外国語科の目標に対するコメント
肯定的 コメント	—This is a great program idea. I believe it is a great way to introduce different cultures in an academic setting while familiarizing Japanese students/children to foreign pronunciations early on. (1 st year)*	—Again the idea is good, but it needs to be refined. (1 st year) —Well put. (1 st year)
	—...It also helps them practice foreign sounds while they are still flexible learners, which is really important to language learning and will help them sound more like native speakers later on. This is a great goal! (1 st year)	—The description is straightforward, and because it's shorter, easier for me to understand. (1 st year) —This is a positive approach to help students at junior high schools to focus on the four basic communication of learning a language. (2 nd year)
	—I think this is a positive approach, ... (2 nd year) —As far as I can see, it sounds like the objective has a proper focus. The student will experience language through various activities within the classroom. The classroom should be a place where students can feel comfortable, thereby increasing positivity. Part of the "various experiences" in the classroom will include the practical use of language, especially for phrases the students may hear and use every day (e.g. "I don't know.") This experiential learning (acquisition of the language) will be integrated with a little basic vocabulary, grammar, etc. (3 rd year)	—This is a great objective. It should be carried from elementary school through to higher grades. (3 rd year) —I like it. (4 th year) —It sounds good. (4 th year)
	—It seems to be a good basis. (4 th year)	—This is fine, but misplaced. (7 th year)

ALT 自身の 解釈に 基づく コメント	<p>—I interpret this as introducing students to different countries, through the English language. The emphasis is on fun and making lessons enjoyable, and emphasizing the differences in language, climate, clothes, and food in other countries. (1st year)</p> <p>—They want students to develop an interest in other languages. (1st year)</p> <p>—Developing an understanding of languages and cultures is important. (1st year)</p> <p>—Basic introduction to foreign language. Create a fun environment for language acquisition and introduction to topics relating to foreign cultures. (1st year)</p> <p>—I believe the objective wishes to emphasize the importance of actually communicating with a foreign language. It does so primarily by letting young students gradually adjust to languages and people not familiar to them. (1st year)</p> <p>—The goal is to introduce children to foreign languages and get them excited about learning new languages and cultures. It also helps them practice foreign sounds while they are still flexible learners, ... (1st year)</p> <p>—To support a basic understanding of foreign language through experience. Expressing foreign language in a positive manner. (1st year)</p>	<p>—To formally start the study of English, starting with the basics. (1st year)</p> <p>—They want students to be able to speak, read, write, and understand basic foreign language. (1st year)</p> <p>—This objective is similar to the primary schools' objective with a focus on specific skills of listening, speaking, reading and writing. (1st year)</p> <p>—The four basic pillars of language will be taught with culture and foster a willingness to use foreign languages. (1st year)</p> <p>—The goal is to get kids started in the basics of the new language and to make them interested. It seems like fostering a love of the new language is a really important part of this. (1st year)</p> <p>—Building on primary objectives, adding communication to the list. (1st year)</p> <p>—All four skills should be introduced, as well as cultural activities. (2nd year)</p> <p>—Teach students everything. It should take a step by step approach including phonics. (3rd year)</p>
----------------------------------	---	---

* () 内の数字は、ALTとしての経験年数を表している

の目標に関しては、「4技能の指導」(‘four skills,’ ‘listening, speaking, reading and writing’) という今回の学習指導要領改訂を象徴しているキーワードが、その具体的な使用語彙は別にして、ALTの回答には使用されていた。

ALTの経験年数による違いという点では、「ALT自身の解釈」に基づく記述が来日直後のALTから多く出されていることが興味深い(小学校の目標に関して7名、中学校の目標に関して6名)。これは、おそらく回答した新規のALTが来日時のオリエンテーションを東京で受けており、また、当該の県でも本調査を実施した直前の二日間にわたってオリエンテーションを受けているので、そうした来日時のオリエンテーションで小学校外国語活動及び中学校外国語科の目標や実際についての講義を受けてきているということが影響したものと思われる。一方の「肯定的なコ

メント」については、ALTの経験年数による差は特に見られない。

次に、小学校外国語活動の目標に関わっては、表2に挙げた目標に関する「肯定的コメント」と「ALT自身の解釈」という二つのタイプに加えて、「否定的なコメント」という形での回答が記述されていた。こうした「否定的コメント」は、さらに「目標記述の英語表現に関する否定的コメント」と「目標内容そのものに関する否定的コメント」という二つのタイプに下位分類することができる。以下、具体的な記述例を表3に示す。

小学校外国語活動の目標については、その言語表現の観点からは、「一文が長すぎること」(‘too long’)と「内容が曖昧であること」(‘vague’)という大きく二つの問題点がALTから指摘さ

表3 小学校外国語活動の目標についてのALTの否定的コメント例

	新規参加者 (13名)	1年以上の経験者 (12名)
言語表現・スタイルについて	<p>—The message is usable, but it is too long for one sentence.</p> <p>—It’s quite a run-on sentence, but is not too difficult to understand. I wish it was a little more concrete,</p> <p>—I find the description to be too technical and somewhat vague. I feel it can be written better and still keep its meaning.</p> <p>—This description is rather vague; it doesn’t suggest how to “foster a positive attitude toward communication,” or how to “familiarize” students with English. What are “various experiences”?</p>	<p>—A very long sentence! It’s very vague and doesn’t really say very much. What are “communicative abilities” and “various experiences”? Last section (underlined) is clear in meaning. (2nd year)</p> <p>—I think it is too broad. Also, an objective should be stated individually (so use of conjunctions to join two objectives don’t work). You can call it a vision?</p>
目標自体について	<p>—... I think it overlooks the ability of younger children to be able to pick up a language more easily, and to have more time to devote to language, since there is less school pressure.</p> <p>—Communication is important---so is reading and writing (a little) at the later levels (4th or 6th grade.)</p>	<p>—...however using too many languages in the curriculum will enhance the awareness of Japanese children, but would be quite difficult to teach all at once in one classroom session. (2nd year)</p> <p>—I think that only one language should be focused on and not learning only basic words of other languages when no one really knows much about each language.</p> <p>Actually I think it’s a waste of time. (3rd year)</p> <p>—Only oral skills. No writing and reading. They should at least be introduced to reading unintentionally (see the letters but not focused on and for reading purposes.) Teach phonics. (2nd year)</p> <p>—I wish the government to encompass all four areas from the beginning stages of foreign language acquisition, not just in later stages.</p>

	<p>The body of the objective should be taught in social studies lesson, not in a specially made foreign language subject. If students learn in social studies, it becomes a more serious topic and standard in formation. (3rd year)</p> <p>—I think it should be specified to what level students should learn to read or write, to minimize confusion at JHS. (4th year)</p> <p>—This aim focuses on “spoken” skills, but for students (to fully develop English skills, or to create a strong foundation for English learning), they need to study all skills (reading, writing, listening, speaking) at once. Japanese students would highly benefit from basic phonics programs to teach sound, spelling and simple phonetic reading from a young age, just like American or British students learned English. Learning basic sound rules first will greatly influence future study. Just saying vocabulary and playing communication games will not be enough to improve overall Japanese English level. (7th year)</p>
--	--

れた。目標記述の表現内容に対するこれらのコメントは、来日直後の ALT にも経験を有する ALT にも共通してみられ、また、表2で指摘したように同じ記述内容を肯定的にとらえている ALT もいることから、英語表現に対する個人的な嗜好が多分に反映された結果であると解釈することができよう。

一方、「目標内容そのものに対する否定的コメント」は、8名の ALT から出された。とりわけ、話す・聞くという側面のみ重視している目標に対する疑問や批判、逆に言えば読む・書く技能も指導目標にすべきであるとする意見や（‘read or write,’ ‘all four areas’）それと関連するが児童の潜在能力を最大限活かすべきであるというコメントがみられる。また、フォニックスの活用を提言する声も2名の ALT から聞かれた。

こうした「目標内容そのものに対する否定的コメント」には、来日直後の ALT も言及しているが（2名）、大半は1年以上の経験のある ALT（6名）からのものである。これは、当然と言えば当然の結果と言えるだろう。すなわち、来日直後の ALT にとっては小学校の外国語活動を実際には体験してはならず、目標記述に示されている英語表現そのものから判断して回答せざるを得なかったと言えるが、一方の1年以上の滞日経験を持つ ALT は、小学校の外国語活動に直接関与している場合であれ、中学校での外国語教育に関与している場合であれ、教室での学習者の姿を目の前にした経験があり、そうした実体験から目標にみられる「不備」を経験的にとらえた結果であると考えられる。

3. 結論と今後の課題

本調査で明らかになった点をまとめる。

まず第一に、改定された学習指導要領における中学校外国語科の目標記述については、ALTからは概して肯定的なコメントや個人的な解釈を示したコメントが出され、否定的なコメントや疑問等はなかった。一方、小学校の外国語活動の目標記述に関しては、肯定的なコメントや個人的な解釈を表した回答に加えて、否定的なコメントや疑問等も示された。否定的なコメントは、大別して、(1) 学習指導要領の英訳に用いられている英語表現、特に一文の長さや“various experiences”等、使用されている用語の曖昧さに対する疑問と(2) 話す・聞くという口頭でのコミュニケーションに限定されているという取り扱われる内容に関する疑問とに大別された。

これらのコメントをALTの滞日年数との関係で考えると来日直後のALTの否定的なコメントは、言語表現に焦点を当てたものが多く、一方1年以上の経験を有するALTからは、小学校外国語活動の内容面に対する否定的コメントが多く出されたという違いがみられた。小学校の外国語活動に直接関与しているか、いないかは別にして、1年以上日本でALTとして勤務してきている者は、何らかの形で小学校外国語活動を経験したり、参観する機会があったと思われる。そのような経験が児童期の子ども達の可能性に対する期待、特に読む・書く技能の伸びを期待するコメントへと今回の調査ではつながったのではないかと思われる。一方、来日直後のALTには、小学校、中学校を問わず、目標について自分なりの解釈を試みるコメントが多くみられた。これは、来日直後のオリエンテーションを東京でも、また該当の県でも受けた直後であり、オリエンテーションの研修内容が回答に何らかの影響を与えたためと考えられる。

今回の分析結果から、今後ALTや小学校教員に対する研修内容をどう構想するかを考えたい。まず、外国語活動の目標については、日本語での記述に関しても様々な疑問が出されている。特に、小学校の外国語活動の導入に懐疑的な立場の側からは、学習指導要領の解説に使用されている文言についての批判には手厳しいものもある⁵⁾。確かに学習指導要領解説にも「コミュニケーション能力の素地」とは何かについての明確な定義は示されていない。一方で、中学校の側には小学校で培われた「コミュニケーション能力の素地」を踏まえて外国語科の指導にあたるようにとする記述がある。日本語においてさえ、このように十分な理解が得られていない状況にあるのだが、そのような現状を踏まえると一方の当事者であるALTに対する研修ということが重要になってくる。本調査結果でも明らかになったように、外国語活動を外国語運用能力の養成を目指したものであると理解しているALTもいる。関連して、学習開始年齢を早めるべきである、読み書きも指導対象とすべきであるとする意見もみられた。こうしたALTの認識や理解に対して、外国語活動の趣旨や目標、関連する『英語ノート』等の教材のねらいや活用方法について、誰が、いつ、どのような方法で説明するか、移行措置期間も残りわずかとなった現段階では、緊急に解決しなければならない課題であると言える。さらに、学習指導要領で示されている「方向目標」から外国語活動の実際をどの様に計画するか、外国語活動の計画と実施を具体的に進めていく上では、学級担任とALTや外部人材との事前の話し合いが特に重要になるが、そうしたコミュニケーションの機会をどう保障するか、事前打ち合わせの機会が設定された場合、具体的にどの様に進めていくか等、小学校外国語活動の円滑な実施に向けての課題は山積している。このような課題解決の責任を多忙を極める小学校教員に全て委ねることはできない。教育行政にあたる側や大学の研究者が、どの様な支援が可能か、今後の我々の課題としたい。

*本研究は、科学研究費補助金基盤研究(C)(課題番号21520634)による研究成果の一部である。

注

- 1) 文部科学省から、各学校には『英語ノート』、同付属CD、同デジタル版、同指導資料等が配布されている。ただ、2009年に実施された政府による事業仕分けにより「英語教育改革総合プラン」は2010年度限りで廃止とされ、『英語ノート』も平成23年度までは紙媒体で配布される予定だが、その見直しが平成22年度中に行われる。(http://www.mext.go.jp/a_menu/yosan/h22/1288550.htm)
- 2) 財団法人自治体国際化協会(CLAIR)が2007年10月に60名のALTを対象にした調査によれば、来日前にALTは、以下のようなイメージを描いていると報告されている。
 - ・ Japanese students will be well-behaved.
 - ・ JTEs will be fluent in English, and most everyone else will be able to speak at least a little English.
 - ・ They (ALTs: 筆者注) will have an active part in the lesson-planning process.
 - ・ They (ALTs) will receive guidance and feedback about lesson planning from their team-teaching partner.
 - ・ Students will be enthusiastic towards learning English.
 - ・ They (ALTs) will always be given enough work to pass the time.
- 3) B県の高等学校指導課に勤務する指導主事(英語教員)に筆者らが面接を実施した際、高等学校担当の英語の指導主事でありながら、職務の大半はALTの労務管理に費やしているという話であった。
- 4) Non-JETのALTについては、仕事に対する一定の経験があるという点や労務管理等が必要ではないというメリットがある一方で、勤務時間は契約に基づくことが原則であり、例えば放課後に授業計画を議論する等の柔軟な勤務は不可能になるというデメリットも考えられる。
- 5) 小学校外国語活動の学習指導要領の記述に対して批判的な考察を加えているものとしては、山田他(2009)を参照のこと。

参考文献

- 綾部保志(編)(2009).『言語人類学から見た英語教育』ひつじ書房
- 大谷みどり・築道と明(2009).「小学校外国語活動におけるALTの活用の在り方に関する基礎的研究—ALTに対する予備的調査を通して—」『島根大学教育学部紀要』第43巻(教育科学), pp. 21-29.
- 国立教育政策研究所(2009).平成20年度 政策研究課題リサーチ経費調査研究報告書「小学校における英語教育の在り方に関する調査研究」成果報告書
- 築道と明(2008).「外国語活動・外国語科における言語活動の工夫」『教職研修』10月号, pp. 46-50.
- 直山木綿子(2009).「外国語活動における魅力ある教育計画の立案」『初等教育資料』7月号, 東洋館出版社, pp. 26-36.
- 文部科学省(2008).『小学校学習指導要領解説 外国語活動編』東洋館出版社
- 文部科学省(2009).「平成21年度公立小・中学校における教育課程の編成・実施状況調査Ⅱ(C票)の結果について」

山田雄一郎・大津由紀雄・斎藤兆史(2009). 『英語が使える日本人』は育つのか?』岩波ブックレット

CLAIR(財団法人自治体国際化協会)(2008). Team-Teaching Relationships. Unpublished paper.
Driscoll, P. (1999). "Modern Foreign Languages in the Primary School," in Driscoll, P. & D. Frost (eds.) *The Teaching of Modern Foreign Languages in the Primary School*. (pp. 9-26)
London: Routledge.

Sharpe, K. (2001). *Modern Foreign Languages in the Primary School*. London: Kogan Page Ltd.

Appendix

ALT Seminar in B Prefecture (August 26, 2009)

The Objectives of Foreign Languages in the Revised *Course of Study*

The following are the overall objectives of Foreign Language Activities at elementary schools and Foreign Languages at J.H.S. Please read each objective and tell us about your candid opinion on the following questions.

1. Foreign Language Activities at Elementary (Primary) Schools:

Overall Objective:

To form the foundation of pupils' communicative abilities through foreign languages while developing the understanding of languages and cultures through various experiences, fostering a positive attitude toward communication, and familiarizing pupils with the sounds and basic expressions of foreign languages

(1) How do you interpret this description? Please write your own ideas and opinions including questions.

(2) Please rewrite the above objective in your own terms.

2. Foreign Languages at Junior High Schools

Overall Objective:

To develop students' basic communication abilities such as listening, speaking, reading and writing, deepening their understanding of language and culture and fostering a positive attitude toward communication through foreign languages

(1) How do you interpret this description? Please write your own ideas and opinions including questions.

(2) Please rewrite the above objective in your own terms.

Your Name: ()

Your experience as an ALT: 1st year 2nd year 3rd year more than 3 years ()

Your e-mail address: (@)

ABSTRACT

A Study on Utilizing the Potentials of ALTs in Foreign Language Activities at Elementary Schools (Part 2) : ALTs' Interpretation of the Objectives of Foreign Language Activities in the *Course of Study*

Kazuaki TSUIDO

Institute for Foreign Language Research and Education
Hiroshima University

Midori OTANI

Faculty of Education, Shimane University

Walter DAVIES

Institute for Foreign Language Research and Education
Hiroshima University

The Japanese Ministry of Education revised its *Course of Study* for elementary and secondary schools in 2008, and one major change in the elementary school curriculum is that “foreign language activities” are to become a compulsory part of the school curriculum in 2011.

The main goal of these activities is to form the foundation of children’s communication abilities by achieving three sub-goals: (1) developing an understanding of languages and cultures through various experiences, (2) fostering a positive attitude toward communication, and (3) familiarizing pupils with the sounds and basic expressions of foreign languages. The Ministry also recommends that homeroom teachers should be responsible for planning activities with help from assistant language teachers (ALTs) or other human resources available in the local community.

This study analyzes how ALTs interpret the Ministry’s English version of the above-mentioned objectives of foreign language instruction both at elementary schools and at junior high schools. Data were collected through a questionnaire survey administered to ALTs in one prefecture. The ALTs were asked to comment on both the objectives specified for elementary schools and those for secondary schools. The two different sets of responses were then compared and analyzed. 25 questionnaires were completed and returned: twelve were from first-year ALTs, who had just arrived in Japan at the time of the survey, and the remaining thirteen were from ALTs who had worked in Japan for at least one year.

Regarding the objectives of foreign language instruction at junior high school, we obtained no negative responses from both the experienced ALTs and newly-arrived ALTs. However, regarding the objectives of foreign language activities at elementary school, there is a marked difference between the two groups: the experienced ALTs produced many questions and ideas such as the importance of teaching literacy skills to children, while the newly-

arrived ALTs stated that the objectives should be more focused and that the language used in the objectives should be clarified. If no appropriate information or instruction is given to ALTs who identify foreign language activities more narrowly with teaching English itself rather than fostering children's basic communication abilities as advocated by the *Course of Study*, then there is a risk of misunderstanding and miscommunication between Japanese teachers and the ALTs. Based on the results of this survey, we discuss how ALTs should be utilized in conducting foreign language activities and also involved in planning in-service teacher development programs in the future that involve both ALTs and Japanese teachers.